

---

# R a i n

P.Lea

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R a i n

### 【Nコード】

N 4 0 3 2 G

### 【作者名】

P . L e a

### 【あらすじ】

雨にトラウマを抱えながら生きている女性の切なくほろ苦い恋愛を書き上げました。

## プロローグ（前書き）

実は以前こちらでSinnという作家名で同じものを投稿したのですが、訳あってペンネームを変えることになり前作を書き直して再投稿します。

以前読んで下さった読者様も初めて読んでいただく読者様にも楽しんで頂けることを願って手を加えました。

読み終わった後に感想などを頂ければ勉強になります！  
宜しく願います。

## プロローグ

AM6:30いつものように携帯のアラームがなる時間だ。

私は毎日アラームがなる1分前に起きて目覚ましを止める…それが習慣でもあり癖だった。

寝ぼけている頭が働きたすと外から音が聞こえた…

「今日は雨が。」

雨は嫌い。

下ろしたての靴や服が汚れてしまうから…それだけではないが今は言いたくない。

今日は日曜日なので恋人と出かける約束をしていた。

デートではない…ただ出かけるだけ。デートを最後にしたのはいつだったか…もう覚えてもいないが悲しくもなかった。

亮と出会ったのは高校2年の時。

友達に紹介されて断るに断れなかったのがきっかけ…それでも何回も会ったり電話をするようになると亮の人柄に惹かれていく自分がいた。

優しいが、その優しさも過度なものではなく心地よかった。

話や趣味も合っていたし、何より彼の物事の考え方を尊敬していたのだ…恋の始まりは、尊敬が6の好感が4くらいだったと思う。

しかし、それも昔の事。付き合ってから7年にもなると愛情やときめきとは縁のない恋愛を好むようになる。

だから私と亮もお互いなんとなく付き合っている…そんな感じだった。

た。

少なくとも今の私はそうなんだと決めつけていた。それが唯一寂しさを紛らわす方法だったのだろう…2人の気持ちが離れ始めたのは一体いつからなのか。それさえも考えたくなかった。

亮は時間に厳しい。

だから私は約束の10分前にはその場所に着くように心掛けていた。しかし今日は雨だった事もあり20分も遅刻してしまった。約束した場所には当然ながら亮が先に着いていた。

「……遅い。」

「ごめんなさい、雨で歩きにくくって」

「雨だって事は最初から分かってたはずだろ？だったら早めに家を出れば間に合ったはずだ」

私は雨でイラついていた、そこに亮の文句を聞いて急に怒りと悲しさがこみ上げてきた。

「だから謝ったんじゃない!!」

「謝ったからって遅刻してもいいわけじゃない…」

亮の冷静さが、さらに私をイラつかせる。

「ちょっとは心配したらどうなの？昔はそんなんじゃないよな」

…亮は変わった。」

そんな事を言うつもりはなかった。

自分の感情をコントロールできなくて…亮に当り散らした。それでも亮は冷静で…それが妙に悲しみを煽った。

「帰る！！」

そう言った私に亮は、勝手にしろとでも言うように手を振りながら背を向けた。

怒りが消えないまま家に着くと悔しさのあまり涙が出た。

後ろ手にドアを閉め、リモコンを握り締める。

「暇になっちゃった…」

そうぼそりと呟きテレビをつけた。

次の日も、その次の日になっても電話もメールも来なかった。

付き合い始めた頃はケンカをすれば必ずその日のうちに電話をくれたのに…。

ふいに寂しくなって電話をしようとするが、ちっぽけな私が見栄がそれを邪魔した。

雨は嫌い。

亮とケンカしてからもう2週間も経つ。

私は自分から連絡することも出来ずに悩むだけの毎日を送っていた。

この2週間で考えたが、こんなに長い間メールも電話もしなかったのは初めてだ。

(…もうだめなのかな。)

そう考えて初めて自分が亮のことをちゃんと好きなんだと気がついた。

今なら自分から謝れば間に合うかも…そう考えても、ちっぽけな私のプライドはそれを拒否した。

こんなプライド捨ててしまえば良い。

でも、こんなちっぽけなプライドでもソレを守りながら生きてきた私にはそれが出来なかった。

情けない…私はこうやって大事なものを失くし続けるんだ。

頭にふと6年前の事件が浮かぶ…

6年前、私はまだ高校生だった。

その時私はひどい反抗期で親と毎日ケンカばかりしていた…

その日も進路の事で親とケンカになり私は家を飛び出した。

自分の為と言ってくれているのだと分かってはいても決して素直に

はなれなかった。

親の愛情をうつつとおしいと思っていたのだ。

家を飛び出しはしたものの外はひどい雨で傘を持たずに出たことを私は後悔した。

仕方なく友達の家を目指しながら歩いていると前から見知った顔が見えた。

その人は母の古い友人で、小さい頃から私を可愛がってくれたので私もよく家に遊びに行ったりしていた。

「悠ちゃん…なの？」

「お久しぶりです。」

「傘持ってないの??とりあえず家に来なさい、傘貸すから」

そう言うと、断る私をなかば無理矢理家に招き入れた。

「はい、タオル…風邪ひくと大変だから。」

「どうも…」

名前は由紀子さん。

由紀子さんには子供がいなかった。

旦那さんも去年病気で亡くなってしまったので、この家には一人で住んでいる。

家の中はとても静かで寂しさを感じた。

「あがってちょうだい。」

そう言い残し由紀子さんは台所へ入って行った。

「あの…私帰ります。」

その言葉が聞こえなかったのか、聞こえないふりをしたのか…

「居間で待ってて」

由紀子さんはそう言った。

私は帰るわけにもいかず、しぶしぶ居間にある大きなソファに腰かけた。

前にある戸棚の上には沢山の写真が飾られていた…旦那さんとの写真や友達との写真。

端のほうにはまだ立つ事も出来ない私と母が抱き合っている写真があった。

立ち上がってその写真をよく見ようとしたり時、由紀子さんがお茶を持って入って来たので私は手を引っ込めた。

「よく撮れてるでしょう？私のお気に入りなの」

そう言った由紀子さんは幸せそうな顔をしていた。

「私と母ですよ…これ」

「そつよ、悠ちゃんはお母さんにべったりだね…可愛かったわよ」

可愛いなんて普段言われなかった私は少し照れながら言った、

「でも最近は何んかばかり」

すると由紀子さんは黙ってしまった。

少し不安になり由紀子さんの顔を見ると目があったてしまい気まずい思いをした。

しばらく沈黙が続いた後、由紀子さんが席を立ち一通の手紙を持ってきた。

私は手紙を受け取り、その封筒をじっと眺めた。

「…母のですか？」

「そうよ、特別に読ませてあげる」

手紙を開くとそこには見覚えのある母の字でこう書かれていた。

由紀子へ

久しぶり。

今日はお知らせがあつて手紙を書きました。

実は子供が出来たの…今日病院に行つたら3ヶ月だと言われました！不安だけど嬉しい、生まれてきたら沢山愛情を注いで育てていく。生まれたら会いに来てね。

手紙は1枚と少なかったが、そこには私への愛情があふれていた。私はこんなに愛されて生まれてきたんだと思うと、今まで母に浴びせてきた言葉を思い出し深く後悔した。

泣くのを必死に我慢している私に由紀子さんはこう言った、

「私には子供がいなかったから余計分かるの…あなたがどれだけ愛されているのか。何が原因でケンカしたのかは知らないけど怒ってないと思うわよ、きつと心配してる。」

私は急に母に会いたくなっていたが、喧嘩して出てきた手前すんなり帰る気にはなれなかった。

由紀子さんにお礼を言った後、足は自然と友達の家に向かってしまった。

日もすっかり落ちた頃、やっと私は家に帰る決心をして友達の家を出た。

重い足取りで帰ってみると家に鍵がかかっている…しばらく家の前に居ると近所のおばさんが、

「お母さん達ならついさっきでかけたわよ？」

「どこに行ったのか分かりますか？」

「そついえば悠ちゃんを見なかったか聞かれたけど…」

そつ言っておばさんは家に入ってしまった。

「まあ、もう少ししたら帰ってくるか。」

そう思っていた…。  
しかし一時間経っても二時間経っても両親は帰ってこなかった。  
それに30分位前から家の電話が鳴り続けている…嫌な予感が頭を  
よぎった。

(電話に出なきゃ…)

そう思い開いているドアを探したがどこも閉まっている。また電話  
が鳴り出した。

ガシャーんツツ!!  
気がつくと窓を割っていた。

「もしもし…」

恐る恐る電話にでると、私は床に崩れ落ちて泣いた。  
電話の向こうから聞こえる声が頭を駆け巡る…何も考えられない。

その日は酷い雨だった。  
母達は車で出かけ事故にあっていたのだ。

雨で道が滑りやすくなっていて…母達は目の前でスリップしたトラ  
ックに巻き込まれ即死だった。  
車には必要のないはずの傘と着替え、そしてタオルがあったと後か  
ら聞いた。

母達は帰りの遅い私を心配し探しに出て事故に巻き込まれたのだ…  
もしも私が意地を張らずに家に帰っていたら…  
もしも私が電話を一本でも入れていたなら…

もしも自分が素直なら…  
もしも…もしも私が母達の元に生まれていなかったのならば。

私はいつもこのプライドを守ろうとして、大切なものを失う。  
一人ぼっちになってしまった時に支えてくれたのも亮だった…。  
事故から1週間後、私は由紀子さんに引き取られる事が決まった。

私は“雨が嫌い…”

だって雨は無力な自分を映し出してしまうから……。

そして“自分が嫌い…”。

私には何の力もないから…いつだって大切なモノを守れないから。

## 恋の終わる音。

亮に会えない2週間は私に色んな事を考えさせた。

相変わらずメールも電話も来ない携帯を見ながら私はため息をついた…

「元氣ないみたいだね、どうかしたの？」

そう言いながら私の顔を覗き込んだのは由紀子さんだ。

由紀子さんとは親子と言うよりも友達に近い感じで接してきた。

由紀子さんをお母さんだと思うのは母への裏切りになるからと自分で決めた事だったが、由紀子さんには本当に感謝しているし、これからもその思いは変わらない。

私は亮の事を彼女に相談してみた。

すると彼女は一言、

「あなたは人間よね？」

そう聞いた。

「…？それ以外に見えるの??」

驚いてそう答えた私を見て少し笑った後、彼女はこう言い出した。

「人間なら同じ失敗は繰り返さないとと思うの。本当に失いたくない物は恥をさらしても絶対に手放しちゃだめ！失敗から学ばなくちゃ。」

「本当は分かってたんだ。でも誰かに背中を押してもらいたかったの……ありがとう。」

そう言うのと急いで亮の会社に向かう支度を始めた。

電車を乗りついで30分もすると亮の働いている会社が見えてくる。

駅から早足で会社に向かう途中で丁度亮が歩いているのが見えた。

2週間ぶりに見る亮は、なんだか別人のようだ。

「りよ……」

彼を呼ぼうとしている口を急いで押さえた。

彼の隣には可愛らしい女性がいた。

2人は楽しげに笑っている……時より女性が彼をじっと見つめ照れているのがはつきりと見えた。

遅かった……彼は私以外の人を見つけていた。

もう手遅れだと思うと悲しいのに泣くことも出来なかった。

その場から動くことも出来ずにしゃがみこむ。

(あの人すごく綺麗……亮とお似合いだ。)

「……悠か？」

彼が私に気付いて驚きながらこう言った。

「こんな所で何してるの？」

「あ……あの亮に会いに……」

そこまで言うと、涙がぼろぼろと私の目から落ちた。  
私が泣き出すと亮の隣にいた女性は、忘れた書類を取ってくるからと足早に会社に戻っていった。

私達は、こんな事で終わるの？

私達の7年間はこんなにももろかったの？

そう言いたかったが言葉にならなかった。

泣き止まない私を落ち着かせようと亮は歩きながら話そう…と言ったが私は首を横に振って、その場を後にした。

ふらふらと力なく歩き出すと同時に、石につまずき転んでしまった。

パキッ！

履いていたミュールのヒールが折れて踵にぶら下がっている。

私はこの時恋の終わる音を聞いた…。

## 忘れ物

小さい頃に大好きで毎日読んだ絵本がある。

その絵本の主人公はとても欲張りで、願いを一つ叶えてあげようと言った神様にこう言うのだ。

「それなら願い事が何回でも叶うようにして下さい」

それを聞いた神様は飽きれて少女の元を去ってしまう。

…それからの少女は神に見放された欲深き人間と皆に蔑まれ生きてゆく。

幼かった私には理解しきれなかったが、今思うと残酷な話だ。

そして今の私はこの少女と同じ…亮が居てくれるだけで幸せだったのにそれ以上を望み、たった一つの幸せを手放してしまった。

彼から別れを告げられるのは私には絶えがたい事…それなら自分から彼の元を去ればいい。

そう思つて別れの言葉を携帯に打ち込んだが、別れを告げなければ亮と恋人同士でいられるのだと思うと、送信ボタンが押せなかった…。

胸を締め付けられる感覚に襲われながら家までの長い長い道を泣いて帰った。

家に着くと由紀子さんが温かいコーヒーを入れてくれた。

それを持つたまま部屋に入ると、1冊のアルバムを手に取り開く。

…そこには亮と幸せそうに微笑む私があった。

私達は旅行が好きだった。

北海道や大阪：タイなどもよく行っていたが中でも一番気に入っていたのは沖縄だった。

水族館には毎回行っていたし、泊まるホテルもいつも同じ…

「もう来飽きちゃったよ。」

そう言う私に亮は決まってこう言う。

「きれいな夕日だね。」

口では文句を言っていたが、このホテルのこの部屋から見る夕日が私は大好きだった。

さっきまで綺麗な青だった海が…ゆつくりと赤にもオレンジにも満たない色が変わっていく様は何度見ても感動できた。

夕日を見ながら亮にもたれ掛かる…会話もない、邪魔するものもない、聞こえてくるのは心地よい波の音のみ。

この時は、この時だけは…私達の心がぴったりと1ミリも離れていないと感じられた。

幸せな空間…幸せな時間……幸せな笑顔、そして決して忘れる事のない思い出。

今となっては本当にただの思い出でしかなくなってしまった。

すっかり冷めてしまったコーヒーをすすりながらまた大きなため息をついた…私達の幸せはどこに？

私達はどこで間違ってしまったの？そう呟きながら静かに思い出を閉じると、また切なくなった。

ああ…きつと私達は幸せを、あの部屋に忘れてきてしまったんだ。そう思うとまた頬を涙が伝った。



## 異変。

いつもと同じように鳴るうとしていたアラームを今日は2分前に止めていた。

2分早く起きたからではない…昨日の光景が頭から離れず眠ることが出来なかったからだ。

疲れきつた体は仕事に行く時間になっても動こうとはしなかった。考えてみると、最近は休みと言う休みをとっていない。

「休暇をとろう。」

すぐに会社に電話をして休みを1週間もらった。何をしようか…ふと頭にあの夕日が浮かぶ。

「忘れ物をとりに行かなくちゃ…ね」

そう呟いてベッドから出ると、すぐに荷作りを始めた。

別に、あのホテルから夕日を見れば亮との事がどうにかなると思っ  
つていなかった。

ただ…ほんの少しの間だけでも幸せだった頃を取り戻せるんじゃないか？そう思ったのだ。

そんな淡い期待を胸に準備を終えて居間に向かうとそこには由紀子さんが居た。

「その荷物…旅行にでも行くつもりなの？」

「うん。」

まさか本当に旅行に行くとは思っていなかったのか由紀子さんは驚いてこう言った。

「会社は？」

「休暇をとったの。最近休みがなくて疲れちゃって…」

そう言った顔がよほど疲れて見えたのか、由紀子さんはそれ以上何も聞かなかった。

「そう、気をつけて行ってきなさいね！」

「はい…行ってきます。」

家を出ると外は快晴だった。

駅まではタクシーで行こうと思っていたが、散歩がてら歩くことにした。

駅に着くまでの30分は思い切り太陽の光を浴びて心の光合成をしている気分だった。

「植物が光合成すると育つ理由が分かる気がするな…」

そんな独り言を言っていると駅が見えた。

時刻表を見ると次に電車が来るまでは15分。友達にメールでもしようか。

そう思い鞆の奥底にある携帯を探し出すとサブディスプレイに着信が2件あると表示されていた。

(ん…??誰からだろう?)

急いで携帯を開いてみると着信は2件とも亮からだった。

そして2回目の着信の後に留守番センターの文字が…震える手をおさえて深呼吸をした後ボタンを押す。

機械的な女性のアナウンスが妙に耳に響く…

「メッセージを1件お預かりしています。お聞きになる場合は1を押してください」

汗ばむ指で1を押してみる。

そこには聞きなれた亮の声でこんなメッセージが入られていた。

「話があります、メールでもいいので連絡を下さい。」

ふと頭に昨日の光景がよぎる…

「このメッセージを消去する場合は9を、保存する場合には0を押し…」

気がつくとアナウンスが終わるよりも早く0のボタンを押していた。

「ただ今のメッセージを保存しました。用件は以上です。」

電話を切ると電車が来た。

「もう15分も経っていた?」

そう呟きながら携帯を握ると電車に乗った。

座る場所を探しながら歩いてみると、4人席が空いているのが見えた。

そこに腰かけて辺りを見回してみる。

平日の昼前だけあって人は少なかった。

学校に行く気があるのかないのかわからない女子高生やお年寄り、可愛い子供をつれて幸せそうに笑っている母親。

優しく淡い光が差し込んでいる電車の中は少なからず私の心を落ち着かせてくれた。

窓の外を見ながら平和だなと思い少し嬉しくなる。

亮は私に別れを告げるつもりなのだろう…そう思うと今の私はこの電車の中で一番不幸な気がして泣きたくなった。

最近は何んだか感情の浮き沈みが激しい気がする…。

それもきつと疲れているせいなんだろう、この旅行でゆっくりと体を休めれば普段の生活に戻る…私はそう思い込んでいた。

その事が後でひどく私を後悔させる事になるとも知らずに…。

この時少しでも自分の体の異変に気付いていたら…あんなに悲しい思いをしなくてすんだのに。

幸せのカケラ。

電車を降りて羽田行きのバス停を探していると、目の前に目当てのバス停が見えた。

（もうバスが来てる…急いで乗らなくちゃ。）

そう思いバスに乗り込もうとした。

「ちよつと！乗るのは券を買ってからにして下さいよ。」

少し強面の男性に怒られた。

「券…ですか？」

私はバスにあまり乗った事はないが、記憶が正しければお金を払うのはバスから降りる時だった気がする。

私が驚いているとその男性が説明をしてくれた。

「このバスは羽田空港にしか行かないんですよ。だから券買わないと乗れないの、アンタそんな事も知らないの？」

そう言っただけで困ったな、と言っ顔をした。

「すみません。一人で行くのは初めてなもので…あの、おいくらですか？」

「そこに書いてあるでしょ。」

男性が指差したのは料金表だった。

(別に口で言ってくれたっていいのに。)

そう思いながら、料金表に書かれた通りのお金をピッタリ渡してバスに乗ろうとするとまた怒られた。

「荷物はこちらに渡して下さい!」

「何ですか!?!」

驚いている私に大きなため息をつきながら、

「他のお客さんの邪魔になりますから。」

そう言っで私と荷物を引き剥がすと、早く乗れと言わんばかりに睨みつけた。

バスに乗ると窓際で私達の会話を聞いていた女子高生が笑いをこらえていた…

(恥ずかしいな。)

そんな事を思いながら一番後ろの席に座ると私が乗り終わるのを待っていたかのようにバスはすぐに動き出した。

(考えてみれば一人で旅行に行くのは初めてだな…バスに乗る時だつて今までは亮がお金出してってくれたんだな。私…全然気付いてなかった、ごめんね亮)

一人になってみると改めて亮の存在の大きさに気付かされてしまう。

だめだな…私は。

しばらくするとアナウンスが流れた、

「羽田空港、お降りのお客様は忘れ物にご注意ください。」

バスを降りるとさつきとは違う男性が荷物を渡してくれた。

お礼を言っただけ荷物を受け取りロビーに向かう。

幸いにも私は1時間後の便に乗れることになった、

「1時間か、ご飯でも食べようかな。」

そんな事を言っているとき右の方にカフェが見えたので、軽く遅めの朝食をとることにした。

「いらっしやいませ、ご注文が決まりましたらお呼び下さい。」

そう言ったウェイトレスからメニューを受け取ると、しばらくそれを眺めた。

「すみません、注文いいですか？」

「はい、お伺いします」

「じゃあ、このモーニングセットください。」

時計を見てみるとモーニングセットを頼める時間を30分も過ぎていた。

「ごめんなさい！時間を見ていなかったから…」

「いえ、大丈夫ですよ。私もメニューを下げ忘れていたし。」

「えっと…じゃあコーヒーと……」

慌てて他に頼めるものを探している私に彼女は、

「モーニングセットをお持ちします。大丈夫、うちのコックも時計は見ないんです。」

そう言っつて厨房へ入っていった。

( いい雰囲気のお店だな。 亮とも来たかった… )

15分も待っているとききのウェイトレスがモーニングセットを持ってきた。

「お待たせしました。モーニングセットになります。」

「ありがとうございます大丈夫でした？怒られたりとか…」

不安気に聞いた私の顔を見て彼女は笑いながら言った、

「大丈夫ですよ。それにこのモーニングセットは美味しいから是非食べてほしかったです。」

「本当に美味しそう。」

そう言っつと彼女は嬉しそうに微笑み、お辞儀をしてテーブルを片付ける為にまた店の奥へと入っていった。

彼女の言う通りこの店のモーニングセットはとても美味しく私を幸

せな気持ちにさせてくれた。

遅めの朝食をゆっくりと食べ終えた後、時計を見ると飛行機が出るまで20分位しかない事に気付き私は急いで立ち上がった。

すると、急に周りの景色が歪んだ…正しく言うなら私には歪んで見えた。

よろけて椅子につまづき転んでしまった私に気付き先程のウェイトレスが駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

心配そうに私の顔を覗き込んでいるウェイトレスに声を掛ける。

「大丈夫、ただの貧血だと思う…うるさくしちゃってごめんなさい」

そう言いつつも私は不安な気持ちでいた。

小さい頃から私は健康な事だけが取り柄で、貧血で倒れることなど一度もなかったのだ。

…私は一体どうしたのだろうか？

体を気にかけて起き上がるのを手伝ってくれたウェイトレスにお礼を言い、モーニングセットの代金を払うと私は足早に店を出た。

ロビーでは搭乗手続きを促すアナウンスが流れている…私も早くしなければ、そう思い貧血を起こした事など忘れて走った。

少し、くらくらとしたが搭乗手続きは滞りなく終わり私は無事に機内に入った。

自分の席もすんなりと見つける事ができ、安心したせいなのか満腹だったせいかは分からないが、私は席に座ると5分もしないうちに眠ってしまった。

「……様、お客様……！」

(ん……？誰……？)

起きると私の横に客室乗務員が居た。

「お客様、お休みのところ申し訳ありませんが安全の為にシートベルトをお締めください。」

「は、はい」

慌ててシートベルトを締めた。

「ありがとうございます。何かご用がありましたらお近くにおります係りの者にお申しつけ下さい。」

そう言うと彼女はまた歩いて行った。

彼女の後ろ姿を見ながら私は考えていた。

(人に起こされるのなんて何年ぶりだろう……いつもなら人の気配がするだけで起きてしまうのに。)

「昨日寝ていなかったから……」

まるで自分に言い聞かせるように何度も言った。

しばらくすると、また眠気に襲われた……

(どうせ飛行機の中なんてする事もないし。)

そんな言い訳をして私はまた眠ることにした。

「悠、悠…聞いてくれよ」

ふいに私は聞きなれた声に眠りを妨げられた。

「…？亮なの？」

ゆっくりと目を開けると、そこには昨日の女性と亮が並んで立っていた。

どうして？なぜここに亮が居るの？辺りを見回すとさっきまで飛行機に乗っていたはずの私はベッドの上に居た。

「何の用なの…？その人は誰。」

「その事で話があるんだよ。」

「聞きたくないわ。帰ってよ…！」

亮が口を開けば私達の関係は終わってしまう、私にはそれが分かった。

亮の話や聞くこととしない私に痺れを切らしたように亮の隣にいる女性が話し始めた。

「亮さんは、あなたと別れて私と付き合いたいって言うてくれるのよ…！今ここで別れてくれるでしょ？」

ああ…もうだめだ。こんな形で亮と終わるなんて…

「帰ってよ…帰って!!」

叫んだ瞬間私は開いていたはずの目をまた開いた。辺りを見回しほっと胸をなでおろす。

夢だったのか…私はちゃんと飛行機に乗っていた。

「すみません、水をいただけますか？」

近くに居た客室乗務員に声をかけると、すぐにコップ一杯の水をくれた。

「ありがとうございます」

そう言うと水を一気に飲み干して窓の外を見た。

そこに広がっていたのは青く澄んだ空と海…亮との思い出の地に来ている。

私は今、亮との幸せのカケラを一人で探し出そうとしていた。たった一人で…。

一人ぼっち。

空港を一步出ると懐かしい気分になった。

(…最後に来たのはいつだったかな。)

沖縄は考え事をするにはぴったりの場所だと前から思っていた。

人も空気も時間さえも急ぐのを忘れてしまう島…しかしその為に来たのは初めてだったので少し悲しくなる。

(…できれば考え事の為には来たくなかった。)

この土地の空気は、いつ来ても私の肌にぴったりと合う。

特にこの季節が一番…初めて亮と旅行に来た時も、ちょうど秋だった。

「うそ…沖縄って一年中暑いんじゃないの?」

「馬鹿だな、そんな土地あるかよ。」

私は亮との初めての旅行に浮かれすぎ、季節の事など考えていなかった。

私が持ってきていたのはキャミソールや半袖ばかり…地元の人もある格好はしていない。

「寒いし恥ずかしいし最悪。」

「しょうがないな…これ着てれば?」

亮は私の肩に自分の上着を掛けた。  
着てみると温かさと一緒に亮の香りが私を包み込んだ。  
甘い香りに包まれて幸せに感じたのを今でもはつきりと覚えている。

「少し歩こうかな…」

私は亮との思い出を辿るようにゆっくりと歩き出した。

（あ…あの店は亮とペアで置物を買った店だ。）

（あそこは私達のお気に入り場所…綺麗な海が見渡せるのよね。）

（ここは料理がまずくて二人で落ち込んだ店…）

思い出の場所に着くたびに足を止め、ゆっくりと目を閉じてみる…  
心がぼかぼかと温かくなるこの感覚は言葉では言い表せない心地よ  
さだ。

一人で来たはずなのに…そこには亮が居た。  
もちろん見えはしない…声も聞こえない、触る事さえも出来ないが  
私の隣には亮の温もりが寄り添っていた。

「一人で来たつもりでいたのにね…」

そう言った私は、きつと笑顔だった。  
ふと気が付くと辺りは暗くなり始めていた。

「泊まる所探さないよ。」

私は迷っていた…亮との思い出が詰まったあのホテルに行こうか違うところを探すのか。

結局私の足はあのホテルに向かうことを決めた。急いでタクシーをつかまえる…

「すみません、ホテルまで」

私を乗せるとタクシーはすぐに走り出し、私は不安と懐かしさの間で少しの間苦しんだ。

（このまま、一人であのホテルを訪れて私は大丈夫なのだろうか。）しばらくすると、私の悩みなどお構いなしにタクシーは目的地に着いてしまった。

運転手に代金と心ばかりのチップを渡すと、焦る心を落ち着けるように胸に手を当てホテルのロビーを目指して歩き出した。カウンターの前に立ち上ずった声を抑えつつ、

「予約をしていないのですが宿泊は可能ですか？」

そう聞いた。

「申し訳ありません。本日は満室となっております」

幸か不幸か思い出の詰まったこのホテルは私が泊まるのを拒否したらしい。

「明日ならキャンセルができた部屋にご案内できたんですが…」

その言葉に、私は何か運命的な響きが混じっているのを感じた…まさか。

「キャンセルが出たのは何号室ですか？」

「703号室ですが…。」

やはりそうか…予感は当たっていた。

キャンセルが出た703号室は私達の思い出の部屋だった。

「明日の予約をお願いします…703号室で。」

そう言ってホテルを出る…風がそつと私の顔を撫でた。

幸せだった時間の断片に触れようと私は1人…一步を踏み出した。

## 命の夢。

今日は思い出のホテルに泊まる日だ、嬉しくもあり悲しくもあり複雑な気持ち。

「緊張する。」

「え…？何ですか？？」

私の前にいるホテルの従業員が不思議そうな顔をしている。

私は昨日予約をしたホテルのロビーにいた、チェックインを済ませるために…

「ごめんなさい、独り言だから気にしないで」

そう言うと部屋の鍵を受け取り703号室を目指す。

見慣れた道のり…いつもと違うのは私が一人きりで来ている事のみ。

「ここだ…」

鍵を開けると部屋は私達が来ていた頃と何一つ変わっていないかった。窓を開けると心地よい風が部屋に入り潮のにおいがほんのりとする。

「変わってないな。」

夕日まではまだ時間があつたが、私は何をするわけでもなくただ窓の外を眺めていた。

どれ位の時間が経つたのだろうか…気が付くと辺りは少しずつ赤く染まり始めていた。

風は冷たくなり人の声もいつの間にか聞こえなくなっている。

「そろそろかな、上着でも着よう…」

上着を着るとまた窓の外を見た。

そこには、やはり何ひとつ変わらない夕日がいた…

「きれい…」

自然と涙が私の頬をつたって落ちた。

何もかもが紅く染まり美しかった。

言葉にならないその想いは相変わらず私の涙に変わり落ちてゆく。  
その夕日を見ながら私は携帯を握り締めた。

「決めなくちゃいけないよね…」

メールを打つ手が涙で見えない、私はメールに亮との別れを打ち込んでいた。

「……………さようなら。」

そう呟くと送信ボタンを押して、携帯の電源を落とした。また呟く。

「来て良かった…」

亮と私の恋は終わってしまった。

しかし私の心は晴れやかだ。確かに辛く悲しいが胸のつかえは取れていた。

「私の悲しみを知っているのはアナタだけね」

夕日に笑いかけると静かに窓を閉めた。

その日私は不思議な夢を見た、私は暗くて狭い所に居るようだ。息苦しくて気持ちが悪くなった。すると向こうに光が見えるのに気が付く。

あそこに行かなければ！そう思った。しかし…もがけばもがくほど光は遠ざかり最後には消えてしまった。息が出来なくなった私は気を失う瞬間叫ぶのだ…

「お母さん助けて!!」

夢から覚めた私は泣いていた…胸が張り裂けそうな想いでいると、ふとお腹に違和感を感じる。

恐る恐るベッドを出てみると私が寝ていた場所に大量の血が…

「え…あ、何？嘘でしょ!？」

急いで部屋の外に出て声の限りに叫んだ。

「誰か…誰か来て!!」

従業員の車で病院に運ばれて検査を受けた。

「私は…病気なんですか？」

そう聞くと医師は首を横に振った。

「あなたは妊娠していたんですよ、5週目に入ったばかりでした。」

(…でした?)

「あの……え???」

「残念ですが…ご家族の方に連絡はなさいますか?」

私は妊娠していた。

この体に新たな命を宿していた…愛する人の子供を。

しかしその命は生まれる事なく私の中でたっただ…たっただ35日間の生涯を終えたのだ。

最近は何がおかしいと思っていた。

感情をコントロールできなかつたり貧血を起こす事も多くなっていたし、眠気は常に私を襲っていた。

寝ても寝足りなさを感じるほどに。

今になって考えれば簡単な事だった。

私は疲れていたわけではなく妊娠していたのだ。

そしてその命を殺した…自分の事にかまけ必死に私に助けを求めていた命に気付きもせず、その将来を奪った。

さつき見た不思議な夢はその命が終わる瞬間だったのだろう…私が叫んだ、

「お母さん助けて!!」

あの言葉は私の子供の最後の言葉だった。

すべてを理解すると、私の神経はそれに耐え切れずにプツンと音をたてて切れてしまった。

外から聞こえる波の音が雨音に似ていた。

私は夢を見たのだ、命の終わる夢を…。

## 指輪。

白い天井に白い壁…

(ここは一体どこなの?)

目覚めた私はベッドの上に居た。

一瞬この状況を理解する事を脳がためらったが、ゆっくりと思い出す。

なぜ私がここに居るのか…。

「……………っ。」

涙があふれる。

気付いてあげる事さえ出来なかった私の中のもう一つの命。

一度失ってしまった命は二度と私の元には帰らない。

「気が付いたのか…」

(この声は…まさ…か)

この状況を理解する事に必死で、人の気配に気付かなかった…

「……………亮?」

私の横には亮がいた。

(え?何で…倒れたのは昨日のはず、今は朝だし…。そもそもどう

やっつてここを?)

考えれば考えるだけ混乱する。

「お前…2日間眠ったままだったんだよ」

私が混乱している事に気付いたのか亮が言った。

「2日間も…そう」

「その…聞いたよ。子供の事………」

「……………」ごめんなさい。」

謝るしかないと思った。

一生許してもらえなくても謝り続けるしかないと…だって私は…。

「なんで!」

亮が叫んだ。仕方がないんだ…私はそれだけの事をしたんだもの。流産なんて言っただけでも人殺しとした事は変わらないわ。命を無視したんだから…

「お前が謝る事なんかないだろっ!!」

(何を言ってるの?私が殺したのよ…私が)

「お前のせいじゃないんだぞ?自分を責めるなんてやめろよ?」

「……………」私が殺したのよ」

「体の異変には気付けたはずだわ！！でも、私は自分の事を優先したのよ…助けてって言ったの！私に最後の最後まで助けを求めた…」

「でも君が殺したわけじゃない。今の君を見たら子供が悲しむ」

「聞きたくない。どうしてここが…？」

「君から電話があった…覚えていないのか？」

(私が？記憶がない)

私は無意識のうちに亮に助けを求めた。

なぜ亮だったのかは考えなくても分かる、彼を愛しているから。

「お前あのメールなんだよ…」

亮が言う、きつと優しい亮は別れたくないと言えば私に同情して「のままの関係でいてくれるだろう。でも今の私にはその資格がない。」

「意味くらい分かるでしょ？」

「別れるってことか？」

「……………ええ。」

私はこの人と幸せになりたかった。

まだ好き…今すぐに別れるなんて嘘だと言って抱きしめてほしい。  
何十年経つても一緒に居たいと思えるたった一人の人だもの…

「分かった。」

ああ…本当に終わったんだ…一人になった。

この人はこれから私とは違う別の人を愛し、私の事を忘れていくの  
ね…幸せになつてほしい。

「待つてる。お前の気持ちが変わるまで待つよ。」

「何言つてんの？別れるつて言つてるのよ？他に好きな人がいるの  
も気持ち冷めてしまつて知っているのも知つてた…だから別れてあげる。  
解放してあ

げる、同情なら必要ないもの」

この人は優しいからこんな私を一人に出来ないだけ。  
でも同情は要らない。

「同情じゃない。俺はいつだつて本気だつたよ。気持ちが離れて行  
つたのはお前の方だろ？」

(私？そんな事…だつてこの前の人は…)

「会社で一緒だつた人…」

「話があるつて言つたよな？これ」

そう言つて亮が私の手に小さな箱を置く。

白いきれいな箱で赤いリボンが綺麗に結ばれている…

「これは…？」

「開けてみて…」

中には指輪が入っていた。

（婚約指輪？まさか…そんな私の早とちりだったの？）

「結婚しよう…悠。子供の分も幸せになるう？」

嬉しい、涙が止まらない。

生きてきてこんなに幸せだと感じたのは初めて…亮を愛してる。  
両親を失った時も亮が居たから生きようと思えたの。

でも…この指輪を受け取ってしまえば、私は子供を裏切ることになる。

自分だけが幸せな日常に戻る事なんて絶対に出来ない。

私が奪った未来をこの子に返す事は出来ないのに自分だけが幸せになる事はない…一生。

「ごめんなさい、受け取れないわ」

「なんで…子供のことなら…」

「だめよ…私だけが幸せになるなんて出来ない」

亮は何も言わずに病室を出て行った。

「本当にごめんなさい…幸せになってね」

そう呟いてまた泣いた。

胸が苦しくて息が出来ない…涙で前が見えない。

好き…言葉に出来ないほどの想いが涙に変わる。

愛してるから…幸せになってほしいから指輪を受け取る事なんて出来なかったの。

本当にありがとう、こんな私と一緒にしろって思ってくれて。さようなら。

大好きだったよ…亮。

## 永遠の約束。

亮の後ろ姿が頭から離れない…。

私は昨日のうちに病院を出ていた。

そして明日は家に帰る日…沖縄で過ごす最後の日は思い出の部屋で、  
とっていたが先約があったらしく私は隣の部屋になってしまった。

「最後まで最悪だ…」

ふとベッドが目に見えた。

悲しさが込み上げる、

(きつと私はこの罪悪感を一生背負って生きていくんだわ。)

それが私に出来る唯一の罪滅ぼし。

ベランダに出てみると気持ちいい風が吹いていた…目を閉じてみる。  
自分が自分ではない感覚が心地いい。

「ふうっ…」

隣の部屋からため息が聞こえた。

(あ、隣の人もベランダに居るのね)

隣に居るのは男性らしかった、タバコの煙が風に乗って私の鼻に届く。

(亮が吸ってるのと同じ…)

いつもならタバコの匂いは私に不快な思いをさせるが、今は私を安心させてくれる気がした。

(亮と居るみたい…よくタバコの事でケンカしたな)

そんな事を思っているときまた泣きたくなった。

自分の情けなさを恨みながら深呼吸をして涙を止めようとした私は、勢いよく空気を吸いすぎてタバコの煙にむせてしまった。

「ゴホッ、ゴホ…」

隣でガタンツと音がした。

(あ…嫌味かと思われちゃったかも。男の人だし怖いな…)

しばらくすると、タバコの匂いが消えた…

「ごめんなさい、大丈夫でしたか？」

(この声…亮にそっくり？あ…亮かも？)

返事をしようか迷っていると、また声がした。

「あの…」

「はいっ！」

(ああ！返事しちゃったよ…)

私は必死に声を変えて話した、

「大丈夫でしたよ」

「そうですか…考え事をしていたので人が居るのに気付かなくて。」

（私の事かな…）

「あ…の、寒くなってきたんで部屋に入りますね」

これ以上話せなかった…胸が苦しくて倒れてしまいそう。

壁一枚隔てたその先には亮が居る。

その夜も眠れなかった。亮の部屋側の壁にもたれ掛かったまま色々な事を考えて過ごした…

（亮はいつ帰るのかな…明日じゃないと良いけど。せめて飛行機は別がいい）

朝はあつという間に来てしまった。

荷物を片付けていると隣でドアが開く音がした。

亮も今日帰るのだろう…明日は月曜日だし考えてみれば当たり前前の事。

こんな自分の為にここまで来てくれた事に今更感謝してしまった。

亮の足音が遠ざかっていくのを待って部屋を出た。

（最後にもう一度…）

開け放たれている703号室に入ると少しタバコの香りがした。

「ここからスタートしなきゃ…」

「何に向かつて?」

(嘘でしょ…だってさっき出ってたはずなのに)

振り返ると案の定亮が居た。

なんだか嬉しそうな顔でこちらを見ている…

「やっぱり。声で分かったよ…体調は?」

「大丈夫」

「そう…昨日は眠れたのか?」

(眠れるわけがない…隣にあなたが居たのに。いくら私でも、そこ  
まで凶太く生きてない!)

そう言いたくても口が動かなかった。

何も言わない私を見て亮が言った。

「俺は眠れなかった。」

「私は眠れた…」

嘘つき。

自分の性格にはほとほと愛想が尽きた…こんな時でさえ素直になれない。

「嘘つくなよ…壁に寄りかかってたろ、同じ事してたから分かるんだよ」

「最低…知ってたなら聞かないでよ。惨めになる」

「でも自分で決めた事だろ。俺の事捨てたくせに…よく言っよ」

「……………」

亮の言った事に間違いなんて一つもない。  
声が聞こえた気がした…

（また大事なものを手放すの？それで良いの？）

過去の自分の声。

でも子供は？私の犠牲になってしまった子供を裏切る事になる…それは絶対に出来ない。

「もう行くから…元気でね」

急いでドアを目指す。すると後ろから亮の声がした。

「もう一回言っぞ、俺と結婚しよう…幸せにする」

「言ったでしょう。子供を裏切れない…」

甘えてしまいそうになる…このまま幸せになりたい気持ちの方が強いんだから当然だ。

「俺なら子供の分も幸せになる道を選ぶ…」

「それは親の工口よ」

「例えそうでも…俺は自分達の子供の死を無駄にしたくない」

「…無駄？」

何のこと？無駄とか幸せとか何を言ってるの？私に幸せになれって言うの？

「俺は正直…ここに来るまでお前と別れるつもりだった。」

「やっぱり…同情ならいらなくて言ったたでしょう？」

亮は私の言葉を無視して話し続けた。

「でも、ここに来て思い出に触れて考え直したんだよ。指輪もこつちで…同情とかじゃない。本気で幸せにしたいと思ってる。それに気付かせてくれたのは俺達の子供だよ…」

私はベッドに腰かけた。

外からは波の音が聞こえる…失ってしまった命の声を聞くことは出来ない。

でも、もしも許されるなら私だって幸せに続く道を選びたい。

「幸せになりたい…」

「約束する…幸せになろう。」

両親を失った時から抱え込んでいたものの重み…逃れられないと思

って生きてきた。

幸せになる資格…私にはそれがないかもしれない。  
それでも望むくらいは許されるかな。

「ねえ…アナタは許してくれる？」

海に向かって語りかけるとカーテンが大きく揺れた。

きつと偶然、だけど信じてみたかった…自分の中にいたもう一つの存在の声だと。

私は亮の方を向くと首を縦に動かした。

「本当に？」

「うん…幸せにしてね。二人分…」

心地いい波の音を聞きながら、私達は永遠の約束をした…

## 始まりの部屋。

「まだ決まらないの？亮って優柔不断だよね…」

「たかがメニューが決まらないぐらいで言いすぎだろ」

私達の会話を聞いて隣に居るウエイトレスが笑っている。

ここは空港のカフェ…あれから4年の月日が流れていた。

私達は相変わらずケンカばかり…でもその度に絆は深まっている。

あれから2カ月後亮と私は結婚をした。

由紀子さんも喜んでくれたし、亮のご両親も私を温かく迎えてくれた…本当に幸せ。

もちろん傷が癒えたわけではない。

私達は毎年子供に会いに行っている…今もその途中だ。

「俺もモーニングセットで」

やっと注文をした亮に言う。

「もう4年も経つんだね…」

「ん…そうだな。お前もおばさんになる日が近いぞ」

「最低…自分だって同じでしょ！」

亮は私に気を使っているのか自分からは子供のことを話さない。

この人には本当に感謝している。  
私が転ぶと必ず手を差し伸べてくれる…そんな存在。

「お待たせしました」

相変わらず美味しいモーニングセットを食べ終え、飛行機に乗り込む。

「私が窓側ね…」

「分かったよ。早く座れって」

4年前は一人で乗った飛行機…失ったものも大きかったが、得たものも同じだけ大きい。

最近はこの風に見えるようになった…きっと私の人生に必要な別れだった、と。

アナウンスが流れる。

「当機はまもなく離陸します。」

もうすっかり寝てしまっている亮に寄りかかって、私も寝る事にした。

温かい光が見える…その中には一人の女の子がいた。

こちらに手を振っている、しばらくすると私とは反対方向に向かって歩き出した。

彼女には見えているだろう道の先が私には眩しすぎて見えない…気が付くと私は彼女に別れを言っていた。

「さようなら」

目が覚めると、今まで胸につかえていた何かがなくなった気がした。

「私達の長女は…なかなか幸せに暮らしてるかもね」

自然と言葉が出た。

「長女って?」

「長女は長女だよ!」

納得がいかない、という風な顔の亮を無視して私は笑った。  
またアナウンスが流れる。

「まもなく当機は沖縄上空に入ります、お客様は準備の方をお願いします」

あれから4度目の沖縄の地は、4年前から何も変わっていない…。  
買い物がしたいという亮を説得して、あの部屋を目指す。  
ドアを開けると波の音がする…

「ただいま、久しぶり…」

返事は返ってこないがカーテンが揺れる。

亮は毎年ここを訪れる度に小さな花束を置いていた。  
命日ではない…誕生日を祝うための花束。

4年間…決して楽しい事ばかりではなかった。

毎日が罪の意識との戦い。  
でも不思議とここに来れば幸せな気分になれた。  
見えない命が私を励まし見守り続けてくれたからなのだろう…そう  
信じている。

(今日は報告があるよ…まだお父さんも知らないの。一番にアナタ  
に知らせたかった)

昨日私は病院に行ってきた。  
最近体がだるく熱っぽかったので風邪だと思い込んでいたのだ。  
先生が私の肩を叩いて言った。

「おめでとつ」

嬉しくて涙が止まらなかった。

(アナタに弟か妹が出来たの…喜んでくれるかな?)

カーテンが揺れる…

私達はここから始まった。

失ったものは私に大事な事を教えてくれた気がする。  
生きる事の辛さと喜び…今、私の中には新たな命が宿っている。  
不安も大きいが愛おしい気持ちはそれ以上…アナタの分も幸せに、  
なんてきつと無理だからこの子に合った幸せの形を見つけてあげた  
と思います。

(さて、そろそろお父さんにも教えてあげなくちゃ)

「ねえ、実は……」

外には大嫌いだったはずの雨。  
でももう恐くない…私は幸せを見つけたのだから。

この雨は“終わり”の合図じゃない、“始まり”の合図だから。

来年の今頃には、もう一人の家族を連れて…  
アナタに会いに来るよ。  
私達の始まりの部屋に…。

## エピソード

（6年後）

ガチャツ！

「「ただいま……」」

そう言つてこの部屋に入るのは何回目になるだろう。  
相も変わらずこの部屋に訪れることが私達の決まり事になっていた。

「誕生日おめでとう……」

そう言つて亮が愛しそうにベッドに花束を置く姿を眺めていると今  
だに頬を涙が伝つてしまいそうになる。

目を潤ませる私の肩をそつと抱き寄せ亮が空を見上げる。

「雨が降つてきたぞ……」

「……ふふ、幸先が良いじゃない？」

「ね〜ママ、どうして私達はいつもここに来るの？」

カーテンが優しく揺れ……外からは静かに雨音が響く。

私達の前には、病気一つする事無く元気に育つた娘。  
毎年必ず来るこの場所に飽きてしまつたらしい……

「もしかして飽きちゃった？」

「うっん、ここは好き…」

もうそろそろ話す時かな、あなたが生まれるずっと前の話…パパやママの事。

そしてお姉ちゃんの事を…

静かに降る雨を眺めながら愛しい二人の娘に向けて…

「そう…ここが好きなのはどうして？」

「海がキレイだから!!」

「この部屋の秘密が知りたくない？」

「知りたい!」

カーテンが揺れ、波の音が静かに響く…この部屋の秘密。

私達のもう一人の家族の話。

愛してやまないアナタ達の事を。

「ここはね、あなたのお姉ちゃんが生まれた場所なの…」

「お姉ちゃん？」

見えはしない、話す事も触れる事も出来ない家族の話…

そしてアナタを見守り続ける天使の話。



## エピソード（後書き）

長い間お付き合い頂きありがとうございます。ありがとうございました。  
感想などを頂けると勉強になります！  
是非お願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4032g/>

---

R a i n

2010年10月10日18時06分発行